

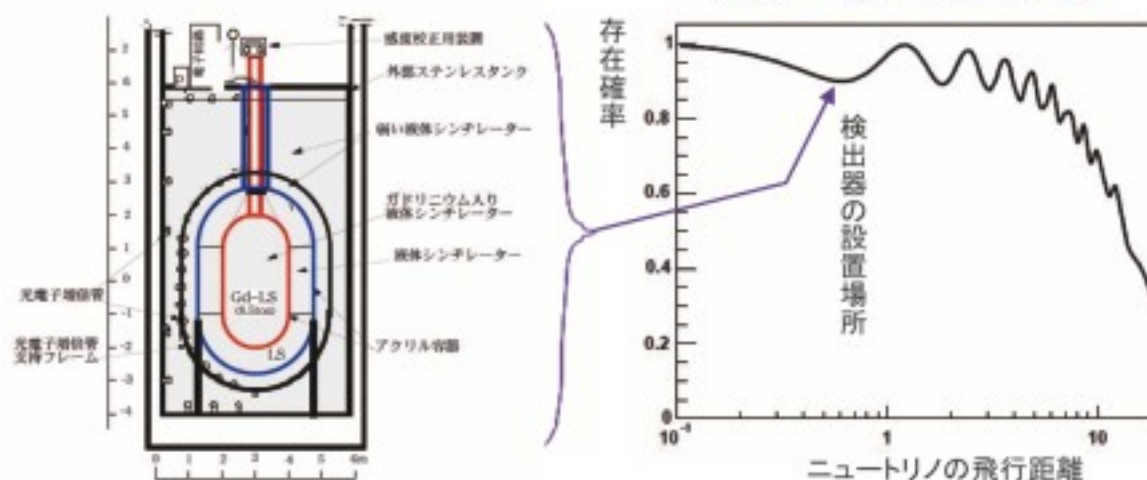
理学部は今

題字 増田芳男理学部長

理学部のホームページ <http://www.sc.niigata-u.ac.jp>

KASKA実験 (最後のニュートリノ振動の検出実験)

ニュートリノは飛行中に別の粒子に変わる



左：KASKA 実験のための液体シンチレーターと光電子増倍管を用いたニュートリノ検出器

右：原子炉からの距離によって変化するニュートリノの存在確率（ニュートリノ振動）

目 次

目 次	
国立大学法人新潟大学と理学部の現状……………	2
後援会長のあいさつ……………	3
理学部後援会事業報告、事業計画……………	3
学科ニュース	
数 学 科……………	4
物 理 学 科……………	4
化 学 科……………	4
生 物 学 科……………	5
地 質 学 科……………	5
自然環境科学科……………	5
附属臨海実験所ニュース……………	6
新任教員の紹介	
大学院・数学科系 山田 修司……………	6
自然環境科学科 松岡 史郎……………	6
臨海実験所 内田 勝久……………	6
SSH 体験実習・実験の報告 ……………	6
卒業生進路状況・平成16年度入学者数……………	7
理学部説明会……………	7
オープンキャンパス2004……………	7
ジュニア世界オリエンテーリング選手権大会に参加して…	8
これからの行事予定……………	8
新潟大学 WEEK ……………	8

国立大学法人新潟大学と理学部の現状

理学部長 増田 芳男

この4月から国立大学法人新潟大学がスタートし、我が新潟大学は創設以来最大の転機を迎えることになりました。皆様ご存知のように、新しい制度の下では、学長のリーダーシップを強化したこと、役員会と経営協議会を設けて学外有識者が大学の経営主体に参加したこと、自主・自律的運営と競争原理を導入したこと、非公務員型の雇用形態を導入したこと、中期目標・中期計画というスキームを導入してその達成度を評価し、結果を国からの運営費交付金の配分に反映すること等が挙げられております。

競争的環境の中で、活力に富む個性豊かな大学づくりを目指して、新潟大学ではいくつかの新しい取り組みが進められてきました。主な取り組みとして、社会の要請に応えた大学院実務法学研究科(法科大学院)、大学院保健科学研究科、歯学部口腔生命福祉学科設置等の教育組織の充実、教育課程の改革としての副専攻制度の導入、新しい研究分野の開拓を目指した超域研究機構の設置、大学としての知的財産の創出・保護・活用を図るための知的財産本部の設置等が挙げられます。

副専攻制は、学生諸君が複眼的な思考を培うために自分の主専攻分野に加えて、他の分野を系統的に学んで所定の単位数を修得した際に、副専攻の認証を与えるという、新しい教養教育のモデルでもあります。従来の教養教育は、種々の専門の基礎をアラカルト的に履修することをノルマとして実施され、改革の必要性が指摘されてきました。新しい教養教育としての副専攻制度をスムーズに機能させるため、五十嵐キャンパス7学部で開講する全ての授業科目に分野名(系統名)と水準を示すコードをつける「分野—水準表示法(ベンチマークシステム)」が導入されました。このことは、総合大学である新潟大学の特徴を生かし、各

学部で開講している授業科目の多くを全学に開放するという画期的な試みでもあります。

このような全学の教育改革の一環として、理学部では副専攻制度と連動する、系統的でわかりやすい教育課程の再編に力を注ぐとともに、全学から求められる自然系共通専門基礎科目の企画・立案・実施の責任母体としての役割を果たすべく、努力しております。また、18歳人口が激減する中で、優秀な学生を確保するための広報活動や、学生の出口としての進路指導(キャリア教育)の強化も重要な課題であり、学部を挙げて取り組んでおります。

先述のように新しい制度の下では、目標・計画の達成状況の評価が大きな意味を持つことになります。理学部では「基礎科学を継承してその発展を担う人材、また、基礎科学を生かして産業や教育の分野で地域社会や世界に貢献できる人材の育成」を教育目標に掲げることに致しました。この目標の達成状況は、学部の卒業生が実際どのような分野で活躍しているのかによって検証されることになります。今後の評価に備え、卒業生が社会で活躍する情報の収集に務める一方、理学部同窓会にも協力をお願いしているところです。

交流協定を結んでいるハンガリー、デブレツェンの科学アカデミー原子核研究所が創立50周年を迎え、3月に理学部後援会のご援助を得て、桜の苗木30本をお祝いとして寄贈しました。これらの桜とともに現在進めている諸々の教育改革の成果が、将来、美しい花を咲かせることを期待して、教職員一同努力を続けております。

後援会の皆様には、このような私たちの取り組みをご理解下さり、暖かいご支援をお願い申し上げ、ご挨拶いたします。



科学アカデミー原子核研究所 (ハンガリー デブレツェン)

理学部後援会長 納谷 伸司



会員の皆様には益々お元氣でお過ごしのこととお慶び申し上げます。

後援会の活動につきましては学生の課外活動及び福利厚生、学部教育事業他に対する援助等がありますが、本学部と家庭の間の掛け橋となり重要な役割を担っておるところでございます。日頃よりあたたかいご理解と絶大なるご支援ご協力を頂だいし、誠に有難く存じます。

さて今年もまた「理学部は今」の発行の時期となりました。理学部広報委員会及び後援会の共同発行で産声をあげた本刊も数えて12号となりますが、初刊発行以来、諸先生、諸先輩の大変なご尽力によりその内容の充実度は号を増すごとに目をみはるものがあります。本学部と家庭を結ぶにふさわしい内容は、さらにその豊かさと期待度を深めてい

くものと思われます。学部の活動状況、学科及び教職員の紹介、学生諸君の活躍ぶり、施設や国際交流等々、普段学生諸君との会話の中からは得がたい事柄も随所にちりばめられており、いろいろな情報を伺い知ることができ、会員の皆様も「理学部は今」を心待ちにしてい下さることと考えております。

目まぐるしく変動する社会情勢の中、環境、諸先生に恵まれた本学部の学生諸君が風光明媚なキャンパスにおいて、楽しみながらもしっかりと勉学、研究にはげみ、それぞれの専門分野で多様化する社会のニーズに十分応えてくれることをこの「理学部は今」から確信して頂き、安心して大いにエールを送って下さる様お願いいたします。

過日の後援会定期総会におきましては事業報告、事業計画共早速皆様方からご承認をいただきまして、ありがとうございました。計画された事業につきましては、工夫と創意をこらし着実に進めてまいりたいと考えております。今後いっそうのご指導のお願いと皆様方のご健勝を祈念致しましてご挨拶とさせていただきます。

後 援 会 報 告

平成15年度理学部後援会事業報告

1. 定期総会の開催（理学部合同講義室）

平成15年 4 月 8 日（火）午前11時から

2. 理事会の開催（理学部小会議室）

平成16年 3 月26日（金）午後 6 時から

3. 各種事業

(1) 学生の課外活動及び福利厚生関係

- ① 新聞の購読(新潟日報、朝日新聞、日刊スポーツの3紙)
- ② 賠償責任保険の加入
- ③ 大学祭援助
- ④ 学生用設備充実の援助(カラーレーザープリンター)

(2) 学部教育事業関係

- ① 特別講演会の援助
数学科、化学科
- ② 学科学生用設備、図書等購入の補助
物理学科、生物学科等
- ③ 新入生合宿研修経費の補助 数学科
- ④ 野外実習経費の補助 地質科学科
- ⑤ 学生実習経費の補助 自然環境科学科
- ⑥ 臨海実習経費補助 臨海実験所
- ⑦ 学生インターンシップ協力事業所との懇談会補助
- ⑧ インターンシップFD 開催援助
講師謝金、ポスター、チラシ印刷費
- ⑨ 国際交流事業関係の援助
デブレツェン大学への桜苗木贈与、ハルビン大学との交流

(3) 卒業祝賀会関係

平成16年 3 月23日（火）15時30分から（朱鷺メッセ

での新潟大学卒業式終了後）東映ホテルで、卒業祝賀会を開催し、卒業生、教職員、保護者、後援会役員の方々から多数参加いただき盛大に行われました。

平成16年度理学部後援会事業計画

1. 定期総会の開催（理学部合同講義室）

平成16年 4 月 6 日（火）午前10時から

2. 理事会の開催（理学部小会議室）

平成17年 3 月25日（金）（予定）午後 6 時から 理学部小会議室

3. 各種事業

(1) 学生の課外活動及び福利厚生関係

- ① 新聞の購読(新潟日報、朝日新聞、日刊スポーツ、日本経済新聞)
- ② 賠償責任保険の加入
- ③ 大学祭援助
- ④ 学生用設備充実の援助

(2) 学部教育事業関係

- ① 特別講演会の開催
- ② 学生研修・実験・実習の補助
- ③ 就職・進学資料収集の援助
- ④ インターンシップ等の実施援助
- ⑤ 国際交流事業関係への援助

(3) 卒業祝賀会関係

平成17年 3 月23日（水）13時からの卒業式（会場：朱鷺メッセ）終了後、15時30分から新潟東映ホテルにおいて卒業祝賀会を開催します。（卒業生の保護者の参加も歓迎いたします。）

■数学科

本年3月31日情報数理科学大講座の寺澤達雄教授が退官されました。翌日4月1日には国立大学法人新潟大学が発足し新しい出発をしました。数学科においては予算面でも予想していた以上に厳しい状態で、数学研究にとっては生命線とも言えるべき重要な雑誌の購読も中止せざるを得ない状況になっています。限られた予算の中で教育と研究の質を落とさないよう、いかに取り組むか創意工夫と努力が求められています。

一方、例年通り4月10日と11日には新入生合宿研修を巻町にある県立青少年研修センターで実施しました。新入生36名全員、復学者の1名と教員7名の参加があり、お互いの親睦も深まり、これからの勉学と生活の準備になったものと思います。また今年度から本格的にアドバイザー制を始めました。各学年に2名の教員がアドバイザーとして担当し、学習面や生活面での指導を行っています。特に学務委員との連携のもとに欠席の多い者やテストを受けなかった者との面談をしてアドバイスをしています。講義に関しては全体としては皆さん良く出席していますが、最初のころは聴講していても途中から欠席の続いてしまう学生もいます。

7月10日と11日にSSH(スーパーサイエンスハイスクール)の実験・実習体験のために新潟県立長岡高等学校の2年生が理学部を訪れました。SSHは将来有為な科学技術系人材の育成に資する目的で指定された科学技術、理科・数学教育を重点的に行う高等学校です。数学科では「ルービックキューブで群論を学ぼう」、「表計算ソフトを用いたコンビニエンスストア経営シュミレーション」、「タイニーベークで曲線を描く」の3つのテーマが実施され、2日間で延べ20人以上の生徒に高度な数学を楽しく学んでもらいました。

■物理学科

物理学科は継続して教育内容の改善に注力しています。理学部内で先駆けて今年度から1年次に「物理学学習法」と題する科目を導入しました。その目的は高大接続における障壁の乗り越え方を提示し、全体的な学力の底上げをはかることです。コンピューターの基本的使用方法、高校と大学における学習態度の違い(高校では学習指導要領の範囲内で学習すればよいのに対し、大学ではそのような学習範囲指定は存在しません)、問題設定から自分で考えることの重要性、ゼミ形式での学習法などについて懇切に指導しています。

研究面での新たな展開としては大学院自然科学研究科内

に物質量子科学研究センターが4月1日に設置されたことが挙げられます。このセンターは国内でも有数のヘリウム液化装置をもち、本学における物質科学研究の拠点として位置づけられています。4名の教員が参加する物理学科はセンターの重要な一翼を担っています。また、同じく本学科教員が中心となって、柏崎刈羽地域との連携の中で基礎科学の教育研究を目指す地域連携先端医療・科学センターが設置されました。その重要な一角として、原子核物理や謎多いニュートリノの中でも現在世界的に最も注目されている課題がKASKA実験(表紙参照)として取り組まれています。

学生と教員との親睦を深めるKelvin祭が昨年に引き続き6月4日に開催されました。参加者は200名を超え、1年生の参加も大幅に増加しました。まず大学院生による各研究室の紹介が行われました。それぞれの発表は工夫が凝らされ、学部学生は研究の内容から大学院生活の実態まで教員からは得られない貴重な情報を先輩から得ました。次に会場を理学部中庭に移し、バーベキューパーティーが開かれ、学生も教職員も楽しい一時を過ごしました。今後も学科内の縦糸および横糸の関係を強化していきたいと思っています。

■化学科

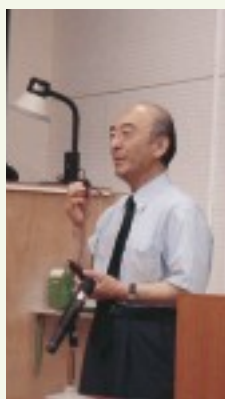
4月には35名の新入生と1名の3年次編入生を迎えました。大学法人化の初年度であり、大学の体制が大きく変わりましたが、講義科目等は継続しており学生にとっての変化は今のところ大きくは感じられないようです。組織でいえば、大学院改革によりこれまで4専攻に分散していた化学科教員は全員自然構造科学専攻にまとまったので、学生からみても分かりやすい組織になったであろうと思われます。また、物質量子科学研究センターが発足し、物理系教員と共に2名の化学科教員が参加し学際領域の研究を推進することになります。本年度からアドバイザー制が取り入れられ、これまで学生委員が対応していた1~3年の学生についてそれぞれに1名の教員がアドバイザーとして対応し、履修指導や種々の相談にのることになりました。来年度以降は(複数教員で一人の学生に対応するなどにより)さらに行き届いたケアを目指しています。

8月6日の理学部説明会で化学科に約70名の高校生が見学を訪れ、先輩である学科4年生や大学院生の説明や実演に興味深く熱心に聞き入っていました。また、8月20日には夏休み期間を利用して、高校生を対象とする化学実験公開講座が本学理・工・農・教育人間科学部の化学系教員を中心として実施され64名の参加者を得て盛況でした。これは、例年行われている企画です。これらの中から将来の新大生が誕生することを期待しています。2月24日にはルミネッセンス年代測定特別ミーティング(世話役:橋本哲夫)

が外国人5名を含めた30名余りの参加を得て物質生産棟で行われました。更に近年、大学院生への海外での国際会議への出席・講演発表を可能なところから実施しています。

■生物学科

4月に21名の新生を迎え、また新しい年度が始まりました。新生には「生命科学への招待」という授業があり、各教員は工夫を凝らして、新生に生物学のおもしろさや学び方を教えています。この授業は教科書を使う授業ではなく、新生は目を輝かせいろんな質問をしてくれます。この授業を通して大学で生物学を学ぶ目的が学生にとって明確になることが期待されます。6月30日には千葉工業大学の三浦謹一郎先生（東京大学名誉教授）にお願いし、学科主催の講演会を開催しました。三浦先生は、日本の分子生物学者の草分け的な存在であり、また世界的に一流の研究成果をお持ちの先生です。「分子生物学の半世紀のなかで」というタイトルにもあるように、学生たちが自分の将来に生物学をどのように重ねていけばよいかをご教授いただきました。講演会には、学科学生・大学院生69名のほか教員や他学科、他学部の方々など総勢90名近くの聴衆が集まり、大変有意義なひとときを過ごすことができました（写真）。この講演会の開催には理学部後援会の援助をいただき、ここに御礼を申し上げます。



■地質科学科

4月法人発足のもとで、地質科学教室は教職員・学生・大学院生が一体となって新しい教室を創造する道を歩み始めました。地質科学教室は新制大学の1学科として発足して以来、教室の構成員がいろいろな面で協力しあって長い歴史と伝統を培ってきました。今、私たちはあらためて地質科学の自然科学としての学問を深めるとともに、地質科学と社会との関わりを考えながら、教室構成員の力を集めて教育と研究を進めていこうとしています。

その一つは多くの卒業生が社会の中で貢献してる事実で立脚し、技術者養成教育を学科の教育体系の中に位置づけ、

技術者養成コースを発足させる準備を進めていることです。体系的な教育システムを作りだそうと新しい試みも始めました。特に野外での地質調査能力を育成することを主眼として、国内でももっとも充実した地質調査法実習・演習体系を築こうと努力しています。

第2は、民間企業に働く卒業生などの協力も得て、学科の教員を中心として、私たちの持つ知識や研究開発能力を社会に還元するために、NPO法人を立ち上げる準備を進めています。教室には長年にわたる知的な財産として、膨大な調査報告や収集した資料・標本があります。当面、これらをデータベース化して、利用していただく方法を模索しています。引き続き、いろいろな方たちの協力も仰ぎながら進めたいと思っています。

何より、こうした教室の創造のためには若い学生・大学院生の協力が必要です。ともに改革を進めていきます。是非、ご意見・ご支援をお願いします。

■自然環境科学科

自然環境科学科は、昨年度創立10周年を迎え、10月には多くの卒業生と来賓の出席を得て、記念式典を開催致しました。また3月には36名の卒業生とともに平成6年から9年間学科の教育と研究に尽力頂いた石塚先生をお送りし、4月には新生34名と後任として松岡先生を九州大学からお迎えしました。

6月には佐々木環境技術振興財団の科学技術知識普及事業費をいただき、学科スタッフによる新潟大学ブックレット「弥彦・角田山から地球環境を考える」(新潟日報社発行)を刊行しました。

8月6日のオープンキャンパスと理学部説明会は、50人の部屋に入りきれないほど、多数の高校生が参加

しました。学科の在学生や院生がそれぞれ研究の具体的なテーマについて、ポスターや顕微鏡観察などの実演を交えて解説し、盛況のうちに終わることが出来ました。また次の7日から8日にかけて、恒例の「信濃川24時間水質一斉調査」が行われ46人の学生、院生が参加しました。この調査では、長野県境から関屋分水までの7箇所の信濃川で、2時間おきに水をくみ上げ、COD、NH₄、NO₂、NO₃、PO₄各濃度、pH、水温などの項目が調べられ、現在、経年変化などデータ解析が行われています。なおここで使用されたバックテストの試薬は、理学部後援会の寄付金を使って、購入されました。



附属臨海実験所ニュース

臨海実験所では、8月5日～7日までの2泊3日の日程で、今年も、新潟県内の高校生と小・中・高校の教師を対象とした公開臨海実習を開催しました。今年、定員（20名）を大きく上回る30名の参加者を得ました（高校生22名、教師8名；他に主催者側10名）。ライフジャケットをつけての磯の生物のシュノーケリング観察やムラサキウニの発生実験、海洋プランクトンの観察など、海と海の生き物に対する参加者たちの興味を深めるとともに、高校生たちにとっては将来の夢や希望を育む良い機会になったことと思います。なお、本実習は、新潟県高等学校教育研究会理科部会、新潟県立自然科学館、新潟市水族館『マリニピア日本海』などの後援・協力を得て、毎年行われています。



大きなムラサキウニを採集して大喜びの高校生

新任教員の紹介



山田 修司（大学院・数学科系）

3月1日に自然科学研究科に着任しました。大学院後期課程修了後、4年間隣県の富山短期大学に在職していましたが、新潟には2、3度しか訪れたことがありませんでした。住んでみると新潟市の広さを実感すると共に、海の幸のみならず農作物の豊富さに驚きを感じています。専門はオペレーションズ・リサーチで、大域的最適化問題の対する最適性条件の解析と逐次近似解法の構築および高速化に取り組んでいます。具体的には、D.C.(Difference of two Convex)計画問題に対し、緩和問題を逐次的に解くことで近似解を求めるアルゴリズムについて研究しています。事例研究としましては、企業等における生産流通問題や配置不可能領域をもつ配置問題等を取り扱っています。短期大学在職時には学生と一緒に研究する機会が無かったので、これからは学生と共に研究を通して様々な経験を共有し、私自身成長していければと思っています。一日でも早くこちらの環境に慣れ、研究や学生指導に努めていきたいと思っています。よろしくお願い致します。



松岡 史郎（自然環境科学科）

4月1日付けで自然環境科学科に着任いたしました。専門は分析化学で、天然水中に存在する超微量金属元素の分析法の開発と、天然水中での微量金属元素の溶存状態がどのように決定されるかを調べる仕事を主に行っています。生まれてこの方ずっと九州で暮らしてきましたので、新潟はもちろん初めてです。新潟というと「雪国」という言葉をすぐに連想してしまうのですが、皆さん口々に「新潟市はあまり雪は降らない」とおっしゃいます。この「あまり」という言葉がどのくらいの積雪量を指すのか、1センチでも積雪すると街中の交通が麻痺してしまう九州出身の人間にとっては今から興味津々です。この新潟という地の特色を活かせる研究ができればと考えております。新潟近郊でおいしい水質、変わった水質を持つ天然水をご存知でしたらぜひ御教ください。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



内田 勝久（臨海実験所）

6月1日に、臨海実験所の助手に赴任いたしました。東京大学海洋研究所で学位を取得後、ハワイ大学海洋生物学研究所でポストクを経験し、理化学研究所・発生再生科学総合研究センター研究員を経て、新潟の地にはじめて参りました。過去5年余りで4度の引越しをするなど、大変さもありましたが、研究および生活面で様々な経験を積むことができ、それを今後の研究と教育活動に活かしたいと考えています。専門は比較内分泌学で、脊椎動物の多様性の背景にある内分泌現象の多様性とその進化に興味を抱き、研究を続けています。現在、最も原始的な脊椎動物・無顎類（むがくろい）や、頭索動物・ナメクジウオを用い、内分泌器官の発生機構、ホルモンの分子構造やその生理作用を解明することにより、脊索動物の内分泌系の進化に迫りたいと、日々、研究を進めています。

佐渡の海は実に美しく、そこには多種多様な生物が生息しています。臨海実験所の特性を十分に活かし、私自身も、多くの動物の生き様やその多様性について理解を深めたいと考えています。持ち前の気力と体力でがんばりますので、新潟大学の教職員、学生、関係者の皆様、どうか宜しくお願いいたします。

SSH 体験実習・実験の報告

昨年度に引き続き、県立長岡高等学校の2年生を対象としたSSH 体験実習・実験が7月10(土)と11日(日)の2日間、理学部と関連する自然研の教員が協力して行われまし

た。各テーマは実習、討論を含めて4時間半で実施し、両日ともそれぞれ1テーマを受講してもらいました。実施したテーマ数(参加生徒数)は、10日が12テーマ(37名)、11日が11テーマ(32名)でした。高校生は10時から15時30分の間、教員やTA(院生、学生)の指導のもとに各テーマに熱心に取り組みました。

高校側で集計したアンケート結果を拝見すると、「教科書にない実験ができて良かった」「実験・実習は楽しかった」「夢中になって取り組んだ」の項目について、高校生からとても高い評価を受けましたが、「課題研究のテーマ設定の参考となった」は低い評価となっており、今後のテーマ設定の参考にしていきたいと考えています。

(SSHWG 主査 徳江郁雄)



閉会式にて

理学部説明会

新潟大学で学部説明会の行事が始まってから既に10年が経ち、すっかり恒例になってきました。今年は8月6日(金)に開催され、初めに全学共通講義棟(旧教養校舎)の階段教室を会場に、12時30分から30分ほど理学部の紹介と概要の説明が行われました。ちょうど真夏の暑い時期でしたが、県内の高校生250名、県外の高校生90名、引率の教員12名と保護者を合わせて合計354名(昨年度は356名)の参加者が

ありました。全体説明会のあと、参加者は各学科に分かれて、学科独自の企画による模擬講義、デモ実験、展示コーナーや研究室および実験施設の見学を16時まで体験しました。

(理学部 広報委員長 徳江郁雄)



オープンキャンパス2004

今年度も8月6日にオープンキャンパスが開催され、73名の高校生と6名の高校の先生方の参加がありました。昨年度の参加者145名とくらべるとかなり減少です。

全体会は、10時から理学部長の挨拶から始まりました。理学とは何かという学部長の話に高校生が真剣に耳を傾けていたのが印象的でした。その後ビデオを中心にしてキャンパスライフの説明があり、休憩後、大学の講義を体験してもらうために60分の模擬講義が行われました。今年度は、自然環境科学科の山岸宏光先生の講義でした。「日本列島の地質災害」という時期に合った講義で、三条市をはじめとする新潟の災害の生々しい資料を駆使された力の入った講義でした。

午後は、各学科の展示とデモンストレーションでにぎわっていました。とりわけ院生が中心となって手をかけて準備した展示や体験コーナーは人気のスポットでした。来年度以降は、もっと多数の高校生が参加できるようにしたいものです。

(理学部 入試委員長 谷本盛光)



平成15年度卒業生の進路状況および平成16年度入学者数

入学者数		卒業生進路(平成16年3月卒業)						
新入学	3年次編入学	学 科 等	進 学	教 員	公務員	民間企業	その他	計
36	3	数 学 科	11	11	2	9	2	35
49	0	物 理 学 科	25	0	2	11	9	47
35	1	化 学 科	24	0	3	6	3	36
21	1	生 物 学 科	17	0	2	1	1	21
25	2	地質科学科	18	0	0	7	1	26
31	3	自然環境科学科	19	3	2	8	4	36
197	10	計	114	14	11	42	20	201

ジュニア世界オリエンテーリング選手権大会に参加して

新大 OC 鎌田 健太郎 (自然環境科学科 3 年)

オリエンテーリングとは、決められたポイントを順番にたどり、ゴールするまでのタイムを競うスポーツです。競技者は地図とコンパスを頼りに最適なルートを選びながら、出来るだけ早く、ゴールを目指します。北欧で生まれたこのスポーツは、野山を駆け抜ける体力だけではなく、地図を読み、最適なルートを選択する能力も必要となり、「体力と知力のスポーツ」といわれています。初めて耳にしたようなスポーツですが、ヨーロッパでは誰もが一度はしたことがあるメジャーなスポーツです。

私が日本代表として出場した JWOC (Junior World Orienteering Championships) は、IOF 主催で出場資格が1984年以降生まれの者であり、これから世界のオリエンテーリング界を引っ張るのであろう若者が競い合う大会です。今年度はポーランドのグダニスク周辺にて、36の国と地域の選手とオフィシャル合わせて365名で、7月4日から11日までの8日間行われました。ちなみに、日本チームは選手12名、オフィシャル4名で望みました。世界から見た日本のオリエンテーリングの能力は参加国の36ヵ国中30番くらいと、実力的には早くはないため、日本チームの目標は上位に食い込むことでした。

日本チームとして出場した12名の選手は、4月に愛知県で行われた選考会レースの結果で選ばれ、3回の強化合宿を静岡と栃木で行い、各自万全な準備をしてポーランドへののりこみました。まず、時差と気候に合わせることに野山の違いを学ぶために、現地で4日間トレーニングキャンプを張りました。簡単に野山の違いについて挙げますと、日本は島特有な急斜な地形であるのに対して、ヨーロッパは大陸的な平坦な地形です。またヨーロッパの植生は、日本ほど青々と草木が生茂っておらず、とても走りやすくてスピードが出ます。トレーニングキャンプを無事終え、開会式を経て、各競技に挑みました。大会2日目のミドル予選(3.6km)は、序盤に大きなミスをして1回やってしまい、



A-final 出場を逃しました。翌日の B-final (4.0km) は上手くまとめて走ったつもりでしたが、世界の壁を感じさせる結果となりました。大会4日目のクラシック(11.5km)は、ちょくちょくとミスをした上に体力が最



後までもたず、ゴールまで走っていくのがやっとでした。大会6日目のリレー(7.4km)は、日本Bチームのために無難にまとめて走りましたが、3走が違うポイントに行ってしまったため失格になりましたが、楽しみながら走れました。

閉会式を持って、この JWOC が終わりましたが、全体的には決して満足のいく成績ではなかったと思います。しかし、いろんな外国人選手と会話ができて、楽しみながら8日間を過ごせました。嬉しいことに、過去の JWOC の成績と比較すると、今大会は選手みんなが、特に男子選手全員の成績が良く、来年以降の選手の励みとなる結果でありました。今後はこの経験を活かし、自分自身のオリエンテーリングの技術向上だけでなく、新潟大学からまた JWOC へと出場できる選手を育成したいと思います。

これからの行事予定(平成16年度後半)

10月 1日	2 学期授業開始
10月25日～31日	新潟大学 WEEK
10月30日～31日	大学祭
11月20日～21日	推薦入試
12月25日～1月 7日	冬期休業
1月21日～22日	大学入試センター試験
2月25日～26日	前期日程入学試験
3月11日～	春季休業
3月16日	後期日程入学試験
3月23日	卒業式・卒業祝賀会

新潟大学 WEEK

10月25日(月)～31日(日)の1週間を「新潟大学WEEK」として、新潟大学の行っている教育研究内容を広くご理解いただくため、様々な行事を開催します。理学部も模擬授業、標本等の展示、実験施設見学等いろいろな企画を予定していますので、是非お出かけ下さい。